
星が降るその日まで

鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星が降るその日まで

【Nコード】

N0816J

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

生徒と教師が「親友」で、「犯罪者」ではいけませんか――。
高校教師の前川は、ひょんなことから教え子の森谷と連続銀行強盗事件を始めることになる。周りに知られぬよう上手く生きていこうとするのだが、相方の森谷はそんな彼にはお構いなしに自由行動をする。そんな二人を描いた小説です。生徒と教師が「恋愛関係」ではなく「親友」という珍しい絆で結ばれた、今までにない様な物語を書いていきたいと思っています。

尚、途中「サイドストーリー」なるものが登場することが多々ありますが、本編、サイドに関わらず、更新順に読まれる事をお勧め致します。

プロローグ（前書き）

あらずじではあんな事を言っていますが、初めて（真面目に）挑戦する小説ですので大したものを書けません。色々と間違った点が出てくると思いますが、そういうときは是非指摘してくださいと嬉しいです。もちろん、感想などをいただければ飛び上がって喜びます。では、長々と失礼しました。

！：この小説は決して、銀行強盗及び他の犯罪を推奨するような内容ではありません。

ブローグ

将来の夢は、何だったろう。

僕、前川淳一^{マエカワジュンイチ}は自分の生徒達の「僕、私たちの人生計画」というワークシートをばうつと見つめながらそう思った。自分が子どもだった頃はこういったものを良く書かされ、想像を膨らませた覚えがある。しかし、大人になった今、自分は教師という頭の片隅にもなかった職業に着いていた。何故、思いもしなかったかつて？それは僕が大の子供嫌いだからだ。困った時には泣きわめき、助けを求め、ただ迷惑な存在にしかないから。もちろん自分にもそういった時代があつた事は重々承知しているが、精神的にこの世代の人間と付き合っていくことが困難なのだ。にもかかわらず、僕は高校教師という職業に着き、今は自分のデスクの上に並べた生徒達の提出物を一枚一枚確認し、成績をつけている。どうしてこうなったかはとりあえず置いておくとして、この地味な作業をしている時ばかりはこの仕事を選んだ自分さえも恨んだ。

「前川先生、まだやってたのか、それ」

「え、あ、ああ。そうなんです。何せ皆いい加減な事を書くものでほら、この子なんて宇宙人と結婚するって書いているんですよ。嫁が宇宙人なんて、どうやって家事をやってもらうつもりなんでしょうね」

「は、は、は。相変わらずまっちゃんは真面目だなー。俺のクラスも同じようなものだけど、それはそれでいいんじゃないのか、将来大物になりそうだし」

「はあ・・・」

自分より二つ、三つ程上の佐伯先生^{サエキ}にそう言われ、僕は曖昧な返事をした。「まっちゃん」と言う彼独特のニックネームが気に入らな

かったのもあつたが、何より宇宙人と結婚すれば大物になれるという発想が到底理解できなかったのだ。彼はきさくでやさしい人だが、どこかずれていて職員の中でも浮いている存在だ。しかし仕事が早く、それでいて生徒たちにも人気の高い教師なので、皆が一目置いているのも、確かだ。僕にはやはり理解できないが。

「そつといえbaumちゃん、これどう思う？」

そう言つて彼は今日の朝刊を僕のデスクの上に置いた。その拍子に生徒達のシートの端がコーヒーにつきそうになり、僕はそれを防ぐためあわててコップの上に手をかぶせた。

「その、baumちゃんつていうのやめてくれませんか？」

「この写真の上の方を見てくれよ。これ、あいつじゃねーの？」

人の話を全く聞いていない佐伯にむつとしながらも、言われた通りに写真を見た。「連続銀行強盗、次の的は？」と大きく見出しのついたカラー新聞で、まるで号外のようにその事件の事しか書かれていない。記事の内容はその名の通りつい先日あつた連続銀行強盗についてで、写真はその現場を写したものだつた。東京都文京区にあるごく普通の銀行で、人ごみの多い場所のようだつた。特に変わったところは見られない。が、佐伯の指さすところを見ると、ある人物が写っている事に気がついた。短髪に、グレーのコート、大きめのカバンとニット帽。

「これ、お前のクラスの翔太だろ？ヒツキーの」

彼がヒツキーと言い放つた瞬間、教頭を含む教師全員が此方を振り向いたので、僕はどうにも耐えられなくなり視線を移した。それから、どうして僕が睨まれなければならないのだ、と思いながら佐伯の耳元でささやいた。

「ちよつと、不謹慎な言い方はしないでくださいよ。でも、まあ、確かに彼に似てはいますけど」

「似ている、じゃなくて、明らかにそうだろ？引き籠りだなんだつ

て結局はサボりなんじゃねーの？」

「そんな事、ないですよ。前僕が訪問に行った時は一度も口を開かないまま寝たきりでしたし、それに」

「そんなの演技かもしれねえだろ？ いまどき教師をからかつてる奴なんざたくさんいるんだぜ？」

そう言つて佐伯はもう一度自分の人差し指で写真の中の人物をつついた。僕は周りの目を気にしつつ、その新聞紙を顔に近づけまじまじと自分の生徒と思われる人物を睨むようにして見た。確かにそれは現在ひきこもりで学校に来ていない森谷翔太の姿であり、そんなことはこの新聞紙を渡された時から解つていた。

モリヤシヨウタ

「つてことか、前川センセ」

その通りだ、全く、お前はなんてことをしてくれたんだよ。と、僕は森谷翔太に目で訴えかけた。午前二時、とある空き地にて僕と森谷はある話し合いをしていた。引き籠り解消につながるかどうかは解らないが、僕たちはよくこうして人の目につかない時間に毎日会うことにしている。彼はここから近い住宅地に住んでいるので、昼間にのこのこと外に出てしまえば他の住人に姿を見られる可能性もある。それを避けるべく、わざわざこのような時間に会うようにしているのだ。森谷は、今までの話を聞き終えると「弱ったなあ」と照れ隠しに頭を掻いて見せた。物事はそんなに単純じゃないんだぞ、と僕は軽く脅しをかけたが、彼はただへらつと笑うだけで、その事についてはあまり深く考えていないように見えた。

「俺の行動が佐伯ングにばれたのは悪かったよ。でも大丈夫だ。誰も俺が遊び人だとは思わない。」佐伯ングと言うのは佐伯先生のニツクネームであり、生徒達が彼の事をよくそう呼ぶ。森谷が彼をそう呼ぶようになったのは、引きこもりが始まってからだだった。

「僕が言っているのはそういうことじゃないんだ、森谷、お前はひ

きこもりじゃなかったのか？」

「あんたのおかげで治ったよ、あんがとさん」

「そうじゃなくて、世間的って言うか、表面ではひきこもりって言うことになっているだろ。それに、未だ完全に治ったということではないだろう？」

いやあ、それは、だから、と森谷はお茶を濁し、僕から目をそらした。引きこもりが解消し、外に出られるようになるのはとても良いことだ。しかし、僕が困っているのはそんなことではない。引きこもっている間に優等生であった彼に異変が起き、耳にピアスをあけ勉強を放置するような青年に変わってしまったことについても、今はなにも言えない。しかし、しかした。

森谷翔太17歳が、連続銀行強盗の犯人だという事は、絶対に知られてはいけないのだ。

ブログ（後書き）

アドバイスなどありましたら、改善につながるので是非かいていただけると嬉しいです。

ぼやき：よく考えたら高校で「僕、私の人生計画」なんてワークや
りませんよね……

サイドストーリー・森谷翔太？

森谷翔太と言う生徒の存在を知ったのは、彼自身が高校1年の時、すなわち僕が26歳でまだ彼のクラスを担当していない頃だ。中間
考查の結果が出た日の朝、いつも通りに職員室へ直行し配布物の用
意でもしようと思っていたのだが、理科室で理数系担当教員、奥山
彰^{アキラ}を取り囲むようにして教師たちが立っているのを目にしたので思
わず足を止めた。その人だかりの後ろの方に、佐伯先生が面白くな
さそうな顔をして立っていたので、僕は彼のほうへ足を運んだ。す
ると、彼はまだ僕が何も言っていないというのに「天才だつてよ」
と吐き捨てるように言い、ニツと笑った。

「中間考查の結果、森谷翔太15歳、全教科ノーミスだつてさ。」

「全教科、ノーミス……」

特に意味はないが、無意識に彼がいった事を繰り返す。全教科ノー
ミス。それは些細なケアレスミスもなく、難しい応用問題及び大学
入試過去問題も全て、正解という意味だろうか。それとも……いや、
それしかないだろう。

「俺たちはさ、あいつらの実力を調べるためにこのテストをやって
いるんだ。だから、全問正解となればこれ以上嬉しい事はないわけ
だ。けどよ、何だか悔しくねえか？全部解かれちゃうのも。」

そう言った佐伯先生に賛成したいと言う気持ちもあった。私たち教
師が徹夜してまで作った問題を、50分でいとも簡単に解かれてし
まうというのは少々悔しい。全問正解となればなおさらだ。が、そ
こで「はいそうですね、とても悔しいですね。」と、彼に合わせて
発言をすれば、周りの教員たちから冷ややかな視線を浴びる羽目にな
る事は解っていたので、僕はいつも通り曖昧な返事をして一人職
員室へと向かった。

職員室前の廊下まで来た時だった。ガタガタ、と音が聞こえたかと思うと、近くの階段を大急ぎで降り、此方をめがけて、いや正しくは僕の後方にある昇降口に向かって駆けてくる男子生徒が目に入る。走るのを注意する事もなく、僕はその生徒の顔をまじまじと見た。彼は確か、先ほど話題になっていた生徒、ほら、えっと、森谷何とかだ。その森谷は眼鏡を片手で握り、何故か大急ぎで僕の横を走り去り、昇降口から上履きのまま外へ飛び出した。すれ違いざまに自分の頬に何か冷たい感触がしたので人差し指で触ってみれば、それは真っ赤な血だった。それを見てぞっとする暇もなく、僕は昇降口から教員用スリッパを脱いで外に飛び出し、森谷を追いかけた。

森谷が走るのをやめたのは、ちょうど荒川の土手に差し掛かった時だった。彼は僕の存在に気がつく、少々面倒くさそうに草むらに腰をおろし、手に持っていた眼鏡を川に投げ捨てた。僕がゆっくりと彼の隣に座った時も、彼は何をするでもなく、ただ一点をじっと見ていた。どうやら、反抗をする気はないらしい。まあ確かに反抗をされる筋合いもないのだが、何となくほっとした僕は森谷の手首に目をやった。大きな切り傷がある。自殺のためのリストカットではなさそうだが、ハサミで間違えて切ってしまったぐらいの大きさの赤い線がずっと肌に入っていた。すれ違いざまについた血はきつとこれだったのだろう。今はもう止血しているが、先ほどは切りたてだったのかもしれない。切れたて。我ながら、いやな言い方だと思った。

「貴方も、慎重なタイプなんですね」

僕がこれからどうしようか、と今日の授業について考えていたときに森谷はいきなり口を開いた。

「ん？」

「学校を逃げ出す子がいた。そうすると、大抵連れ戻す側の人は二

つのタイプに分かれる。無理やり、もしくは強引に説得して帰らせるか、慎重に、話を聞くふりをするタイプ。先生は、慎重なタイプなんです」

全く、そんな事を言われてもどう返事をすればよいのか解らなかった僕は、適当にああ、と言って森谷とは反対方向に顔を向けた。しかし、慎重なタイプ、つまり話を聞く「ふり」をするタイプであると勘違いされたままではなんだか気分が悪かったので、僕は一方的に訂正をした。

「ああ、僕は違うよ。僕は三つめ。何もしないタイプだ。話を聞くふりすらしない。全てにおいて興味を持たないタイプだ。」

「じゃあ、なんで追いかけてきたんですか？授業も放り出して」
「そうだよな、教頭に怒られるよなと思いながら、僕はまた「ああ」と言った。

「それはな。君が落とし物をしていったからだ。」

「落とし物？」

何だそれ、と眼鏡をかけていないために焦点が定まらないであろう森谷の前に、赤い色の付着した自分の人差し指を出し、そのまま彼の頬に擦りつけた。森谷はポカンとした顔のまま、俺の指が離れるのをじっと待っていた。

「これで、君の血は君に返した。僕の指は綺麗になったし、じゃあ、さようなら」

そう言つて、教師らしからぬ行動をとった僕はまた学校への帰り道を歩き始めた。何故、彼を連れ戻さなかった？そんなの簡単だ。前にも言っただろ？子供は、大嫌いなんだ。

サイドストーリー・森谷翔太 ？（後書き）

ご意見ご感想、評価をしていただけると嬉しいです。

サイドストーリー・森谷翔太？

森谷翔太と再開したのは、部活動の時だった。僕は写真部の顧問を無理やりやらされていたので、部員が勝手に決めた一泊二日の野外撮影会に参加せねばならなかった。と言うのも、僕は幽霊部員ならぬ、幽霊顧問だったので、部員たちが何をしていようが、企画して居ようが、その情報はギリギリまで耳に入って来ないのだ。僕の間にも佐伯先生と、もう一人山城先生と言う女教師も写真部の顧問だった。例年に比べて当時の写真部の人数は異様なものだった。だから、顧問も3人、と言うわけだ。山城先生は根っからの写真家で、よく一人で出かけては写真を撮っているらしい。佐伯先生は僕と同じく無理に入れられた様で、数学の本とにらめっこをしている事が多かった。

その当時は気がついていなかったが、森谷翔太も写真部の部員だった。彼は幽霊部員だったようだが、何故かその企画だけは参加する事にしたらしい。後々聞いてみれば、親に行けと言われたから行った、との事だった。部長がわざわざ野外撮影会の説明を森谷の家の留守電に入れておいてくれたのを親が聞き、薦めたらしい。きっと、毎日勉強漬けの息子を陰ながら心配していたのであるう。

当日、僕たちは少し古い昔ながらの旅館に泊まる事に決めた。そこからだと綺麗な小川も近く、写真を撮るには良い場所だと部員の一人が言ったからだ。森谷の姿は見当たらなかった。僕はその時点では彼が部員だという事を知らなかったのだ、他の部員が撮影して居る所を遠くからぼうつと見ているだけだった。太陽が反射し、小川がキラキラと光るところを撮る部員もいれば、咲いていた薺をクロームアップして連写する者もいた。僕は写真を撮るという事のどこが面白いのかさっぱり理解できなかったのだ、部員たちが笑顔でレ

ンズを覗き込む姿はそれはもう滑稽だった。しかし、この課外活動に参加した事に後悔はなかった。自然に囲まれるのには悪い気がしなかったし、空気が澄んでいて都会と言う牢獄から抜け出してきた気分になったからだ。時々女将さんが様子を見に来たついでにお茶を持ってきて、「暑いですねえ」とほほ笑みながら言うのは温かみがあつて、本当に心地よかった。

事件が起きたのは、その日の夜だった。僕と佐伯先生は相部屋で、僕は彼が未だ数学の本と対談をしている時間に眠りについた。特に疲れていたわけではないが、佐伯先生と会話をしたいという気分ではまずなかった。僕からしてみればこれはちよつとした息抜きの旅行だったので、起きていたらこんな時まで教師二人で生徒について語らう事になるやもしれぬ、と恐れていたのかもしれない。幸い彼も眠りに就こうとしている同僚を引きとめる事はなく、僕は安心して朝を迎える事が出来ると思っていたのだが、そう簡単には行かなかった。

「前川先生ー、起きろーほーらほーら」

そう言われて僕は鬱陶しそうに寝がえりをうち目を半分だけ開いた。佐伯先生の姿がぼやけて見える。腕時計に目をやらずとも、まだ朝出ない事は解っていたので、僕は嫌々ながら喉の奥の方から乾いた声を絞り出した。

「…何時だと思ってるんですか、嫌ですよ」

「起きないとうつ伏せにして穴にろうそく突っ込むぞー」

恥ずかしい事ながら、そう言われると目を開くわけにはいかなかった。彼ならやりかねない。

「解りましたよ、起きればいいんでしょう、はい起きましたよ、何なんですか、もう」

「お、まっちゃんのえっちー」

「寝ます」

佐伯先生の事情は簡単なものだった。森谷翔太がいない。山城先生が午前一時ごろ、部員の人数確認のため各部屋を回ったところ、森谷翔太の姿だけが見つからなかったらしい。この時僕は初めて翔太が部員だった事を知らされ、軽いショックを受けたのを覚えている。

「と言う訳でさ、まっちゃんも手伝ってくれよ」

「まあ事情が事情ですし。じゃあ佐伯先生は裏の方お願いします。」

僕は池の方を見てきますね」

そう言っ僕はまだ覚めきっていない目をこすりながら、

裸足のまま中庭に出て柵を超え、小川へと向かった。

嘘を吐くつもりはなかったのだが、気がつけば足が小川の方に駆けだしていたのだ。

「さすが写真部部員だな」

そう僕が後ろから言うと、森谷はびくつと肩を震わせ、それから睨むようにこちらを振り返った。森谷翔太は小川に居た。夜の小川の写真を撮りたかったのだろう。森谷は僕の顔を見ると、あの時の、と言いかけ口をつぐんだ。

「教師って律儀だね。居なくなった生徒のために走り回って探すなんて。」

便所に行ってるだけだったらどうするんだよ」

「本当にな」

僕は不機嫌そうに頼杖をつく森谷を前に携帯電話を取り出し、佐伯

先生に電話を掛けた。

ふと森谷の横に目をやると、そこには使い捨ての水中用カメラが4つほど無造作に置かれていた。よっぱどの写真好きと見える。

何枚撮ったんだ、と訊こうとしたその時、佐伯先生が電話に出た。

「もしもし、前川先生？」

「森谷の件です。池の方にはいませんでした。ついでに小川の方にも来てみたんですが、」

ちらりと森谷を見る。

「居ませんでした」

何で嘘ついたんだよ、と言いたげな顔をしている森谷の隣に俺は腰掛けた。それから水中用カメラを手に取り、匂いを嗅ぐ。魚臭いとまでは行かないが、あまり良いものではなかった。いまだき使い捨てカメラなどを使う学生は見た事がないな、と思いながら僕はそれを森谷の手の上に置いた。

「起こされたんだ。午前2時にだ。信じられるか？」

たかが生徒一人の脱走のために、僕の睡眠時間を彼は奪い去ったんだよ」

「俺だったらブチ切れてますね」

「そういうことだ」

「は？」

「気分の悪い起こし方をしたから、復讐だ。ほら、見つかるのも時間の問題だぞ、写真を撮りたいならさっさか撮らないと」

「え、ああ、はい」

そう言いながらも森谷はその場から動こうとしなかった。立ちあがって上を向き、使用済み水中用カメラを持った手を挙げ、星空をレンズ越しに見た。それから一人でカシャ、と呟くと、カメラを持つ

手から力を抜く。当然安物のカメラは落下し、その場で壊れた。なんて事を、と言う前に森谷が笑顔でピースサインをした。な

「ものより思い出、ってね」

本編・第一話（前書き）

お待たせしましたやっと本編です！

本編：第一話

その日はずっと、悪寒がしていた。

隣で僕と全く同じ作業をしている佐伯先生から「ちよつと暇なんだつたら雪見大福買ってきてよ」と生徒たちの成績表を書いている真つ最中にいわれ、心底機嫌の悪かった僕にとんでもない知らせが入ってきた。携帯の着信音、それも佐伯先生がこっそり設定したのであるう某プリティーなんとかアニメの主題歌をコンビ二で鳴り響かせた僕は、顔を赤面させてコンビ二から立ち去り、電話に出た。かけてきたのは翔太だった。

「なんだよこんな時間に。もう夜の7時だぞ」

「先生の時間感覚って何よ。7時なんてまだ早い時間じゃん。俺んちの門限深夜二時だよ？ なめてんの？」

翔太の「なめてんの？」が具体的に何を意味するのかがよくわからなかったのでそれを適当に受け流し、雪見大福が溶けると佐伯先生にどやされるの僕は学校へと向かう道を歩き始めた。

「それはお前の家が異常なんだよ。で、なんか用か」

「ああ、そう、久しぶりに電話が来たんだ。＜アイツ＞から」
翔太の＜アイツ＞という言葉聞いて思わず眉を潜める。

「本当か？ ここしばらく何の連絡もなかったのか？」

「そう、嫌になっちゃうよね。意味わかんねえ。前の依頼は四ヶ月前だっけ？ 馬鹿げてるよね。でもいたずら電話でもなく、本人だった」

「何で分かるんだよ」

「俺に電話で敬語を使うやつなんて＜アイツ＞しかいねーだろうが！」

「今時セールのおっさんまでお前とタメならこの世も終わってる

つてことだな」

「揚げ足とるなよ、俺は知人の話をしてるんだよ」

そういうと翔太は学校で待つ、といって無理矢理電話の電源を切った。

場所も時間も設定せずに、どうやって待ち合わせようと思っていたのだが、そんなのいらぬ心配であると気づかされたのは佐伯先生に雪見大福を手渡しに行ったときだった。

「ようまっちゃん、遅かったね、大福」

ええ、まあ、とごまかしながら僕は隣で自分の成績表をまじまじと見ている翔太に目をやった。

「お前、何でここにいるんだよ」

「だって先生と学校で落ち合うつていったじゃん」

「それはそうだけど」

隣で佐伯先生がコンビニ袋の中から雪見大福を発掘し、「あれ、期間限定のじゃないじゃん」と言っているのを無視して僕は続ける。「お前それは勝手に見ていいものじゃないから」

翔太は俺が指差した先にある自分の成績表をひらりとつまみ、ひゅつと僕の方に回転させながら投げた。

「だって佐伯ングが……」

「佐伯先生！」

「何だよ、森谷はまだ何も言っていないだろ？ 何、以心伝心？ もしかしてお前から付き合ってるの？ 俺そういうのは干渉しない主義だけど結婚式には呼ばないでね」

「佐伯先生！」

キツと睨みを利かせた僕に気圧されたのか、佐伯先生は「別にかかっただけじゃんね……」と捨て台詞を吐くと、雪見大福を頼張った。おまけに半分食べるか、といってフォークの刺さった雪見大福を翔太に差し出したところ、案の定バランスを崩したアイスがべたりと床に落ちたものだから、僕は途方に暮れた。

時刻は午後8時半。職員室にいる佐伯何とか野郎を置き去りにして、僕と翔太はとある教室で話し込んでいた。例の「<アイツ>からの電話」についてだ。

翔太によると、今度の決行日は日曜日。銀行には約数十人の人が入るだろうから、慎重に任務を遂行するように、とのことだった。

もちろんその命令通り、僕らは日曜日に銀行強盗をすることにした。

初めて「アイツ」から翔太に電話がかかってきたのは翔太が僕の担当生徒になって間もない頃だった。初めましての挨拶もなく、翔太は自らの個人情報をも「アイツ」に棒読みされ、「この日のこの時刻、どこどこに銀行強盗に入らなければお前の母親が突き指をします」と訳の分からない事を突拍子もなく命令され、一方的に電話を切られた。折り返しかけてみてもつながらず、その後も個人情報の流出先を探す事に熱中していたため、翔太自身その脅迫内容の事はすっかり忘れていた。約束の日、翔太は銀行はおろか、外に一步も出なかった。すると翌日、母親が突き指をした。

翔太がその事について僕に相談してきたのは4回目の電話があった日だった。一回目は母の突き指、二回目は父の骨折、三回目は実家の炎上。脅迫を無視し続けたら「アイツ」の言った通りにすべてが進んだ。さすがに変だと気がつき、僕に相談してきたときの脅迫内容は「お前の通う学校の教室破壊」だった。しかも偶数のクラスのみだ。

「それは実行するしかないな」

自分でも、自分の発言に驚いた事を良く覚えている。

「強盗だぜ？ 犯罪だぜ？ いいのかよ、教員が犯罪なんて」

「誰だって犯罪は駄目だ」

「じゃあ何で」

「学校が破壊されるよりはましだ。それに話を聞いたところ、大掛かりな話には聞こえない」

「それはまあ、そうだけど」

銀行強盗と言っても、＜アイツ＞の言う銀行強盗は本来の意味と同じ物を示していなかった。聞くところによると、＜アイツ＞が翔太に決行してほしいのは「銀行強盗」ではなく「銀行にいる人の財布を盗んで特定の場所に運ぶ事」だった。ならば紛らわしい言い回しをするなど言いたいところだが、彼に連絡を取るすべもないので、その思いを直接ぶつけた事は未だにない。

最初の任務を無事遂行すると、その翌日に＜アイツ＞から「任務遂行おつかれさま電話」があった。翔太だけに依頼をしたのに僕まで参加した事を＜アイツ＞は咎めなかったが、代わりに俺の個人情報はいつの間にかくアイツ＞にだだ漏れになっていた。不思議な事がもう一つ。もう何度も任務を遂行してきた俺たちだが、それについてのニュースがいつこうにあがってこなかった。任務の内容はいつも同じ。しかし「銀行内の指定人物の財布を奪え」という内容に加え、近場を指定してくる事が多かった割には「銀行内のスリに注意」という張り紙さえ見当たらないのだ。だからだろうか、僕たちは与えられた任務に対する緊張感が薄れ、次第にその連絡が入ると「はいよ」と素直に受け入れてしまうほどになっていた。こうして僕たちの「銀行強盗生活」が始まったのだ。

本編・第一話（後書き）

佐伯うつぜええ！著者の私も笑ってしまっほうつぜえ！けど彼は、手のひらの上で他人を踊らせるのがうまい人なんです。

番外編・週末の二コマ（前書き）

これは本編とは無関係なので読んでも読まなくても大丈夫です。たぶん。

あとギャグなので会話が無駄に多いです。

番外編・週末の一コマ

【週末の一コマ】

「解んなーい」

「何が？日本語の読み方が？それとも教師の機嫌の取り方が？」

そう言つて僕の目の前で頼杖をつく翔太を見て、僕は大きな溜息をついた。

翔太と僕は今、学校から二駅離れたところにあるファミリーレストランので昼食を食べているところだ。

僕はたらこスパゲッティ、

翔太はペペロンチーノというどちらも腹にたまりそうにないものを選んだのだが、

元々ドリンクバーで水太りという作戦でここに来たので物足りない気はしなかった。

それでここに来た理由といえば、表面上はこの間のテストの内容について翔太が質問したいと言つていたからだだったが、そんなの学校でもできるところを見ると、雑談をするべくというのが本音だろう。

学年一位の座は守り続けている翔太であつたが、

何の嫌がらせなのか僕が受け持つ古典と佐伯先生の授業は爆睡。

おまけにテストは全問正解なのに、偽名を書いたり裏一面にいかにかに授業が面白くないかを書き連ねてくださったりとまあいいご身分である。

で、その天才学生翔太様が今僕にしている事と言えば、この間のテストに書いてあった「氏名」というところに指を当てて「解らない」を連発することだった。

「先生さ、手書きにするならもつときれいに書きなよ。なんて書いてあるのか読めないよ」

「察しろよ天才。なんとか頑張って読めよオール5。ドリンクとって来いよ天才」

「天才天才うるさいよ古典バカ」

「いと美しき天才早くドリンクバーに行って来いよおらおら成績下げろぞ」

とまあこのような調子で話は一向に進まない。

僕も学校に仕事山ほどあるので早く帰りたいのだが、こうして話しているのが楽しくないと言えばうそになるのですすると居座ってしまい、すれ違う店員に苦笑されるばかりだ。

「まあじゃあ俺が頑張って先生の汚い字を読めたとしても、そのあとに来る名前記入欄が狭すぎるよ」

「お前の姓名四文字だろ、五十嵐なめんなよ、五十嵐なんて六文字だぞ、五十嵐なんてな！」

「先生五十嵐にこだわり過ぎだと思っよ、だったら綾小路だっていいじゃないか」

「綾小路なんて苗字の奴クラスにいないだろう！」

とうとう六杯目の紅茶を飲み干した翔太は席を立ち、ドリンクバーエリアへと歩いて行った。

窓際に目をやると、ハロウィンフェスタの紙が貼ってあるのが目に入る。

そして、運悪く丁度その隣の窓ガラスの向こうから不審者がこちらを覗き見ていたのも目撃してしまった。

急いで何も見なかったふりをしたのだが、不審者は僕が見ていたことに気付いたのか、店内に入り店員と一一言話してから翔太の座つ

ていた席に座った。

「ようまっちゃん！学校に来ないと思ったたらこんなところで彼女とデート？」

「違いますよ貴方こそ不審者ですか、俺のカルボナーラ狙ってるんですか！あげませんよ！渡しませんよ僕の460円！」

「それたらこスパゲッティーだろーよ、割安の」

「細かいことを気にするところが数学の先生ですよ、あとそこ連れが来るんで詰めてください」

「彼女？彼女？ねえ彼女？かわいい？かわいい？長髪？黒髪長髪？」

「黒髪長髪の美人ですよ文句ありますかおまけに頭もいいですよまいったか」

「超見たい」

くだらない話で佐伯先生がうずうずしだしたところに、温かい紅茶を入れた翔太がゆっくりともどってきた。ドリンクバーエリアは佐伯先生の後ろ側方面なので、彼はまだ翔太の存在に気が付いていないらしい。佐伯先生はという顔面にやけさせたまま数学の本を取り出し、普段は掛けないメガネまで掛けて良い第一印象を与える準備をしている。

「あ、佐伯先生、その子もメガネっこですよ」

「本当に、黒髪長髪メガネっ子！俺の好みの子だよ！」

「なんならあげますよ、ご自由にお持ち帰りくださいな」

「本当に？でもそれじゃあ彼女が……」

佐伯先生がそう言いかけたところに丁度翔太が登場し、優雅に紅茶をテーブルに置くと笑顔で腰かけた。

「どーもー黒髪長髪美人メガネっこの森谷でーすお持ち帰り1時間に付き諭吉を抜き取ります」

それを見ると佐伯先生は無言でメガネをはずし、数学の本を投げ捨

ててテーブルに突っ伏した。

「解つてた、なんとなくわかってた、なんか都合よすぎると思った
らこれだよ……オール5来たよ……」

「あんたら俺の事まともな名前で呼ぶ気ないんだ？教育委員会に言
おうか？」

「本当になんで休日をオール5爆睡野郎と過ごさなきゃなんないん
だよ……」

「聞けよ」

翔太がそういつたのと同時に、佐伯先生はおもむろに翔太の鞆を漁
り出した。

ほいほいと出てくるのは参考書やら辞書やら大学キャンパス案内だ
ったり至つて優秀な高校生の鞆の中身である。

「佐伯先生、こういうのを詐欺っていうんですよまた一つ学びまし
たね」

「ああ、なんか大事なものを見失った気がするよ、オール5お前進
学とか頭の中にあつたんだ成績落とすぞ」

「理不尽すぎるだろ、大体佐伯ングだつていろいろやってるだろ」

「俺は不健全なことはない」

「勉強のどこが不健全だつていうんだよこの学校進学校だよな！」

「翔太、お前がやると何もかも気に食わないんだ、堪忍な」

日曜日、時刻は午後四時。確か僕たちがこの店に足を運んだのは朝
の10時だった。

また無駄な時間を過ごしてしまったと思いつつ、また来週も同じこ
とが起きるのだろうな、

と隣でまだ言い争っている翔太と不審者を見て僕は微笑んだ。

番外編・週末の二コマ（後書き）

なんかいい感じに終わらせようとして失敗しましたきゃー！

たぶんこの面子でいつもこの店にいつもこの時間に来るんだと思います。

本編・第二話

【二年前】

「じいちゃん、もう帰ろうよー」

そう言った僕の声はゲームセンター内にかかっているBGMと人々の笑い声にかき消されてしまったのか、祖父がこちらを振り返ることはなかった。三時間ほど前から孫である僕を放って一人音楽ゲームに集中している彼は、きらりと光る汗を周囲に振りまきながら軽やかな足取りで踊っている。時には自己流の回転技も交え、指定された曲を難なく踊りきる祖父の姿を見るのはこれで何回目の事だろう。とても活き活きとした表情で全身を動かしている祖父の事を見ているのは苦痛ではないのだが、それよりも彼を取り囲むようにしてできた人だかりに少々嫌気がさしていた僕はもう一度腹の底から大きな声を出した。

「じーちゃん！ 帰ろうよ！」

すると祖父はステップを的確に踏みつつ右手をあげると人差し指を立ててみせる。それを見た僕は自分でも自らの表情が枯れていくのが解った。あれはもう一回だけ、の合図で、今日既に4回も見たポーズだった。それでも人懐っこい笑顔で僕を振り返り、何度も何度も挙げた手を左右に振り回す祖父を見て僕は「仕方ないなあ」と笑ってしまった。

【現在】

ガガガというアラムの音で僕は目を覚ます。耳障りな音を聞きながらうつすらと目を開けると、辺りはまだ暗かった。僕は再び目

を閉じ体をつねらせると、布団のなかから左手を出してアラーム時計を探した。それからアラーム時計など設置していなかった事に気が付くと左手の力を抜いてゆっくりと目を開けた。左側の壁にかかっている時計の針が午前五時を示しているのを確認して半ば絶望してから僕は起きあがる。

大学生になった僕はこうして幻聴を聞きながら起きることが習慣になっていた。毎朝こんな起き方をするのは不愉快だったが、どうしようもないと解っていたので医者にも行ったことがない。薄暗い世界のどこからかチュンチュンとスズメが鳴く声が聞こえて僕は口元を緩ませた。騒音の後に聞く彼らのさえずり程心落ち着くものはない。今日もこれから機械的に生きていく僕に唯一語りかけてくれる友人の声のように感じられた。

僕はゆっくりと着替え、朝食を済ますと外に出て都内を散歩した。講義は9時半から始まるのでそれまでゆっくりと早朝の都内を観察するのが僕の楽しみだった。ベンチに寝そべる人もいれば、首都高速で車を走らせる会社員もいる。いろいろな人がいるのを知ると同時に、自分の小ささを改めて思い知らされる時でもあったが、それも人間らしくていいと思った。

普段鳴らない携帯電話の着信音が静かな大通りに響き渡ったのは、僕が冷たい空気を胸いっぱい吸い込んだ時だった。急いで右ポケットから携帯を取り出すとそのまま開いて右耳に当てた。

「もしもし」

「あ、もしもし？ 金子誠也君だね？」

聞きなれない声に戸惑いつついつもの癖で脳内に人物像を描く。年は30半ば、声は高くもなく低くもなくなので標準体型だろうか。

「はあ、如何して名前を？ それよりどちら様でしょうか」

相手が自分の名を知っていたことより、限りある朝のひと時を邪魔

されたことに少々腹を立てた僕は低い声でそういった。

「私は幹部のものだよ。なんていえばわかるかな？とりあえず君の何倍も偉いと思うよ」

「……………」

意味が解らず眉間にしわを寄せた僕の表情を見透かしていたのか、小さな笑いが漏れたのを電話越しに聞いた。

「君が常人でないことは知っているよ。君にやってもらいたいことは一つ、銀行強盗を阻止することだ」

「はい？　話が全く見えないので切らせていただいてもよろしいですか」

「よくないよ。私は、銀行強盗がT・T・だから君に阻止してほしいって言っているんだよ」

そう謎の人物が言ったのを聞いて背中が凍りつくのを感じた。T・T・その名を聞くだけで体の奥深くに眠っていた憎悪がふつふつとわきあがってくる。憎悪というより、吐き気だ。吐き気と、いつものアラーム音。ガガガガ。

途端に気分が悪くなった僕は、何かが出るのでないかと心配して片手で口元を抑え、言葉をゆっくりと絞り出した。

「あんた……裏の人間か」

「裏だなんて物騒だね。私は普通のサラリーマン様だよ、大学生の金子君」

「自称幹部のあんたが直接命令するなんて、どういうことだ。T・T・の情報がどうしていきなり入ってきた？　それをどうして僕に伝える？　お前は部下にやすやすと重要な情報を流すのか？」

「お前は私の部下じゃない。お前はお前の意思でT・T・を探しているのだから、情報を分け与えてやった。親切心さ。何をそんなに警戒する必要がある？　まあいい。とにかくお前は明日正午過ぎに文京区の銀行で行われる犯罪行為を止めるんだ。わかったな」

「あんたが僕と同じ組織の人間であるという証拠がない。俺は行かない」

そう僕が言い放つと、再び笑いをこらえるかのように男は声を震わせた。

「構わないさ。でも、君は来るだろう？」

そう意味深な問いかけを残して電話は一方的に切られた。僕は携帯電話を耳に当てたまま、騒がしくなった都市の音楽に耳を傾けていた。ああ、祖父が躍り出す。

本編・第二話（後書き）

今回は教師たちは出てきませんでした。この話の金子君も後々彼らと接触することとなるでしょう。とりあえずコミカルな祖父を出せたので満足。祖父との関係や現在の状況等はまた次の話で。

本編：第三話

「またか」

放課後。

職員室に堂々と入ってきて携帯を差し出す翔太に僕はそういった。すると翔太は「仕方ねーじゃん」と溜息を吐くと空いていた佐伯先生の椅子に座った。

翔太が見せてきた携帯のディスプレイにはメールの新規作成画面が映っており、本文欄に「仕事だ」と書いてあった。つまりということかという、きつとまたくあいつから電話がかかってきて、翔太は銀行強盗の依頼を受け入れてしまったのだろう。どういうわけか一度だけ協力した僕の事をくあいつは翔太の仲間と認識してしまったらしく、以来翔太に仕事が来ると必ず僕も協力せねばならなかった。何しろ向こうの正体は謎めいていて、且つ僕らの個人情報握っているのだから、迂闊なまねはできない。

「森谷、生徒指導室にこい」

僕が小声で仕事の詳しい内容について翔太に訊ねようとしたその時、職員室のドア方面から声が聞こえ、その場にいた教師全員が振り返った。普段なら振り返らない。けれども、生徒の名が「森谷」であったことに全員が驚いたのだ。そしてまた、声の主にも驚いていたのである。翔太も椅子に座ったままぼかんとしている。

「佐伯、先生」

「おう、悪いね、森谷ちょっと借りるぜ」

いつになく真剣な表情で佐伯先生はそういうと椅子に座っていた翔

太の手をぐいと引いて職員室の外へと連れて行った。翔太と話をしていたところにいきなり割り込んでくるところは佐伯先生らしかったが、冗談の一つも言わずに会話を成立させたのはたぶんこれが初めてだった。もやが自分の胸のあたりから全身に広がっていくのが解る。違和感と呼ばれるそれは次第に自分の領土を拡大させ、脳の奥底に眠るサイレンのスイッチを押した。自分の中で警報が鳴る。翔太を一人で行かせていいのか？誰もが知っていることだが、翔太は賢い。他の生徒より佐伯先生とは仲がいいが一線を踏み間違えるようなことはしない奴だ。口は悪いが、生徒指導室に呼ばれるような事は尚更しない。そんな彼が何故？そこまで考えて一つ、彼が生徒指導室に呼ばれそうな理由が思い浮かんだ。

——不登校の件……。

翔太は2年次の2月から3年次の5月頃まで不登校、言い換えるなら「引きこもり」であった。表向きはクラスメイトによるいじめとということになっていたが、本当は<アイツ>から電話がかかってきたからだろう。後々聞いてみれば、翔太は特に相談する相手もいなかったので一人で解決する方法を探っていたのだが、学校に行っていたのではいつ誰に襲われるか解らないので家にずっと引きこもっていたらしい。因みにクラスによるいじめは実際にあった。それも一年の時からずっと続いている事だった。はさみで無意味に傷をつけられたり、私物を破損されたりとさまざまな事をされていたようだが、翔太はあまり気にしていなかった。根が強いのもあったが、彼はクラスメイトを友人として見ていなかった。精神的なダメージはあまり受けなかったと以前僕に漏らしていた。一見強がりに聞こえもするが、賢い翔太の事だから本当にそうだったのだろう。

しかし、もし不登校の件について話が合ったのなら生徒指導室に呼ぶ必要はあったのだろうか？自分で言っておいて情けないと思うが、僕と佐伯先生は翔太と特別仲が良かった。例えるのならば、従兄弟

のように、だ。教師である人間が生徒と必要以上に仲良くなる必要はこれっぽっちもないのだが、なってしまったものは仕方がない。久々に波長が合う人間と出会った気がして僕もすんなりと翔太を受け入れていたように思える。そんな翔太を、佐伯先生がわざわざ呼び出すだろうか？放課後になれば呼ばずともやってくる奴なのだからそんなことをする必要は絶対はない。それならば如何して。

「嘘仰い！」

そう怒鳴り声が廊下の方から聞こえてきたのは僕が思考を巡らせる始めてから20分たった頃だった。今は昼食の時間なので生徒は各自教室で昼飯を食べているだろうし、教師はほとんどの職員室にいる。職員室近くの廊下にあるのは校長室、空調室、医務室、そして、生徒指導室。すると同時に、さっきの怒鳴り声はモンスターペアレントのものではないか？と言う案が浮かぶ。それならば、佐伯先生の行動にも納得できる。翔太は何らかの理由でモンスターペアレント様の気に障ってしまったらしく、佐伯は仕方なく翔太を呼び出した、と。これならば、翔太が何をしたのかは別として、つじつまが合う。僕は無意識に立ち上がると、生徒指導室の方へと歩いて行った。途中教頭に引き留められたが、「森谷は僕の生徒ですから」と威勢よく、正義感に満ち溢れた声のトーンで言っと、納得してくれたのか静かに頷いて去って行った。教頭の扱いには、慣れている。

さて、戦場に行くか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0816j/>

星が降るその日まで

2011年4月12日14時23分発行